

プログラム紹介

A コース: オークヴィレッジ / 森林たくみ塾

場所: 岐阜県高山市清見町

日時: 2008年11月22日 ~ 11月26日

■講座のねらい

- 16期生：「前期講座で自分たちが得たもの、学んだもの」を、17期生に「自分の言葉として」いかに伝えられるか。
17期生：環境問題解決のための「具体的行動のひとつ」として「森の手入れを实践する」中で、自分の内面におきる気持ちの変化を大切にしながら、「体験を腑に落とす」。

■講座中に伝えたいこと

知識を蓄えたり考えたりすることだけでなく、課題の解決には具体的な行動に移すことが重要。地球温暖化問題において、森が持つ二酸化炭素固定能力への期待感を理解する。その能力を十分に発揮させるには森づくりを進めなければならない。一人より二人。素人でも束になってかかれば大きな成果を生み出す。そのために、人の環＝人を束ねる仕掛け（ネットワーク）づくりが大切。行動するためには、道具の的確な使用法と安全な作業についての理解が不可欠。

■そのために大切にしたいこと

森での実践的な活動を主軸とする。
森づくり活動には、森を面白がる視点も重要。
体を使って実体験する。（頭でっかちにならない！）
何事もやってみる。（やらなきゃ何も進まない！）

■プログラム進行表

=====
1日目 11月22日(土) 出会い、再開 ~環を広げる
=====

14:00 受付開始

14:20 開講式 / オリエンテーション / アイスブレイク

17期生 -----

15:30 実技 「森づくり導入編」まずは伐ってみよう

17:00 グループ討議「なぜ森の手入れが必要なのか」

兄弟子への質問状

16期生 -----

15:30 実技 「前期講座をふり返って」

17:00 グループ討議「兄弟子にどう伝えるか」

18:00 夕食

19:00 「お互いを理解する時間」

20:00 「兄弟子への質問状」

21:00 「森人大交流会」

22:00 終了

=====

2日目 11月23日(日) 引き渡すもの、受け継ぐもの

=====

07:00 起床
07:30 目覚めの体操
08:00 朝食
09:10 **17期生** 実践「森人、事始め」
16期生 実技「弟弟子を迎える」
引き継ぐ言葉のまとめ作業
12:00 昼食
13:00 森人がつながる ~引き継ぎの儀
14:30 **16期生** プログラム終了、解散

-----以降、17期生のみ-----

14:30 小講義「手を掛けて森を育てる」
16:00 安全作業 ~KYT
17:00 「一日のふり返りと分かち合い」
18:00 夕食
19:00 トークセッション
21:00 オプションツアー「月夜のナイトハイク」

=====

3日目 11月24日(月) 森と私のつながり

=====

07:00 起床
07:30 目覚めの体操
08:00 朝食
09:00 特別講座「稲本正、地球環境を語る」
10:30 実践「森づくり・実践編」前半
11:40 小講義「森と人とのつきあい方」
12:00 見学「森人の暮らしを見る」
12:30 昼食
13:30 実技「森づくり・実践編」後半
16:30 森づくりのまとめ
17:00 特別講座「NECに見る企業のCSR活動」
18:00 夕食
19:00 「一日のふり返りと分かち合い」
19:30 トークセッション NEC社員を交えて
20:30 自由交流会

4日目 11月25日(火) 森と私と、社会のつながり

- 07:00 起床
07:30 目覚めの体操
08:00 朝食
09:00 小講義「木の辿る道 ~ 樹から木へ」
09:45 実技「森づくり・利活用編」
10:45 実技「森のモノづくり」
12:00 昼食
13:00 実技「森のモノづくり ~ 仕上げ・片付け」
15:30 見学「森林たくみ塾」
16:10 見学「オークヴィレッジ」
18:00 夕食
19:00 「一日のふり返りと分かち合い」
19:30 実技「森のモノづくり ~ 作品発表」
20:00 トークセッション
21:00 自由交流会

5日目 11月26日(水) 別れ、旅立ち

- 07:00 起床
07:45 目覚めの体操
08:00 朝食
09:00 スライドショー「5日間をふり返って」
09:30 実践「ソロ ~ ひとりでふり返り」
12:00 昼食
13:00 全体のふり返り
14:00 閉校式
15:00 プログラム終了



■ 1日目 11月22日(土) 出会い、再開 ~ 環を広げる

駅からのマイクロバスの中、16期生たちは久しぶりの再開に沸いている。17期生たちは緊張の表情を浮かべていたが、自己紹介をしながら少し和んできたようだ。



開講式

- 森林たくみ塾・理事長、佃から参加者にあいさつ。
- ・「森の人づくり」とは、「森の人」づくりでもあり、森の「人づくり」でもある。森に関心のある人、森を伝えることができる人を育てる講座であると同時に、森での活動を通して森に気付かされる講座でもある。
 - ・「知っている」から「している」へ。環境問題は、知識を知っているだけでは解決されない。思い切って一步踏み出し、具体的な行動に踏み出すことが大切。
 - ・「腑に落ちる」。体験を通し、腑に落ちるまで納得できる人は、自分の言葉で人に伝えることができる。



実技「森づくり導入編」(17期生)

宿から車で15分ほどの雑木林が森づくりの活動地になる。17期生にとって初めて入る森の中。林学を専攻する学生もいれば、まったくの畑違いの学生もいる。安全な作業についての説明の後、夏の講座で16期生が手入れした場所を見せた。そして、「木の間隔は、傘を差して歩ける程度に間引いてください。隣の16期生の森と同じになるように手入れしてください。」とだけ指示を出した。さて、どうしたものかと迷いながら、それぞれの目で、16期生の手入れした場所を観察する。そして自分たちの作業場所に移り、それぞれに森の手入れを開始した。

はじめはササ刈りを始めたが、木を伐り始めたのは女性陣たち。遅れて男性陣も木を伐り始めた。



「コシアブラは新芽が山菜としておいしいので残しておくといいね、だけど他の木の邪魔であれば伐ってもいいよ。」「枯れ木は伐っておいたほうが安全だね、だけど残しておくとも虫が住み着いて鳥の餌場にもなるよ。」「ホオの木は朴葉を取るの、出来るだけ残してね。」とアドバイスを与えて回る。木の種類も分からない学生たちは具体的に何をどうしたらいいのか迷いながらも作業を進めている。学生たちからは、「はっきりと指示してもらったほうがやりやすい」の声も。



指示を与えることは簡単だ。しかし安易に答えを得ることより、まずは体験をすることが大切。体験を通して生じた興味や疑問などは、知識を収めるための大切な器となる。



グループ討議「なぜ森の手入れが必要なのか」(17期生)

説明もなく始めた森の手入れだが、どんな作業をしたのか、なぜそうしたのかを聞いてみた。

「16期生の森を見て、取り敢えず笹を刈ればいいんだと思った。」「太い木を残そうと、周りの細い木を伐った。」「枯れた木を選んで伐った。」などなど、それぞれに色々な視点で作業をしていたのがわかる。

続いて、森の手入れで疑問に感じたことを聞いてみた。「笹は刈っても、落ち葉は除かなくてもいいのか。」「どうやって木を切るのか。」「切る木をどうやって選ぶのか。」「よい森とはなんだろうか。」「そもそも木を切る必要があるのか。」「伐らないといけない木、伐ってはいけない木はあるのか。」「笹をシカ害から保護している地域もあるのに、笹を切ってもいいのか。」

色々な意見が出てきたが、ここでは回答を示すことはせず、疑問質問を模造紙にまとめて、兄弟子(16期生)への質問状にまとめた。



前期講座をふり返る(16期生)

3ヶ月ぶりに訪れた活動地。夏には緑の葉が茂っていた森も、葉が落ちてすっかり冬の山を呈している。手入れをしていない隣の場所と比較すると、自分たちが手入れした場所は森の中へ差し込む光の量が違うのが見て取れる。

自分たちの手入れした森を見ながら、前期講座で自分たちがどんなことを考え、何を行なってきたのかをふり返ってみた。



グループ討議「弟弟子に何を、どう伝えるか」(16期生)

明日の森の手入れでは、17期生を弟弟子として迎え入れ、自分たちの言葉で指示を出して作業を進めていかなければならない。3ヶ月前に自分たちがどのように思い悩みながら森を手入れしたのか、そのプロセスをしっかりと整理することこそが、弟弟子にも共感してもらえる「自分の言葉」につながっていく。



夕食

森のレストランでいただく食事。16・17期・スタッフと混ざり合いながら席に着き、おいしいお料理を食べながら、テーブルごとに自己紹介。



お互いを理解する時間

事前に提示しておいたテーマで、各自の自己紹介を行った。16期生からは、「前期講座から変わったこと」について。前期講座終了後には「たった3ヶ月では変わらないよ」との声もあったが、組織に加わり行動を始めた、人脈が広がった、など十分に成長を遂げた姿が見られた。

17期生からは「環境に関心を持った原点」を話してもらった。この後の大交流会での話題づくりにもなった。



兄弟子への質問状

弟弟子である 17 期生から、兄弟子である 16 期生に向けて森の手入れに対する質問状を読み上げてもらった。明日の共同作業で、疑問質問が少しずつ解決していくことと思う。



森人大交流会

16・17 期生で迎える一夜限りの交流会。修了生の 3 人も合流してくれて、修了生が活躍する『森×人』の活動も紹介してもらった。環境・森づくりに関わらず色々なテーマで夜遅くまで、交流を深める日となった。

■ 2日目 11月23日(日) 引き渡すもの、受け継ぐもの

実技「森人、事始め」

16 期生(兄弟子)が 17 期生(弟弟子)を従えて、森の手入れの作業に入る。スタッフは親方として、弟子たちの作業を遠巻きに眺めているのみ。弟弟子たちと同じように悩み・考えてきたプロセスを大切にしながら、兄弟子たちは自分たちの言葉で森の手入れを伝えていく。前期講座では人前で話すことさえできなかった 16 期生も、しっかりとした口調で説明をしている姿があった。わずか 3 ヶ月でたくましく成長した姿を見た。





森人がつながる ～引継ぎの儀

いつからか恒例となってしまった、兄弟子たちによる寸劇披露から始まった。そして「森人」代々に受け継がれている「森人の鉦」が、兄弟子から弟弟子に確かに引き継がれた。

兄弟子から一言ずつ伝えることば。

弟弟子からも一言ずつ感謝のことば。

たった2日間の出会いなのに、別れが惜しくてたまらないものになる。弟弟子たちは多くのものを、兄弟子たちから引き継いだようだ。

兄弟子のような成長を約束して、16期生を送り出す。



小講義「手を掛けて森を育てる」

森は人が作り育てる必要がある。

森と人との関わりを、ヨーロッパ、アメリカ、日本、それぞれの歴史・文化の視点から眺めてみた。宗教との関わりで森を見る視点は新鮮であったが、日本とヨーロッパで、森との関わり方の違いが見受けられる興味ある内容だ。なぜ森を手入れする必要があるのかについて、本質的な内容となった。

安全作業 ～KYT

一步森へ入ったら、安全は自分で作るもの。自分の身は自分で守るもの。危険を予知することの大切さを学んだ。引き続き裏山に向かい、チェーンソーで栗の木を伐り倒すデモンストレーションを行い、搬出作業を行った。



トークセッション

この場にこのメンバーで居合わせるのも何かの縁。このメンバーで話し合いたいことを紙に書き出して話題としてみた。このセッションのおかげで、後のコミュニケーションがより深いものになった。

オプションルツアー「月夜のナイトハイク」

林道へ踏み入ると人工的な明かりは遮断され、樹幹の切れ目に広がる空には満天の星空。現代生活の中では、多くの情報を視覚に頼りきり、また刺激にあふれる中で、感覚は麻痺していると言ってもいい。五感を最大限に活用すること、更に研ぎ澄ますことの大切さを森の中で感じた。

■ 3日目 11月24日(月) 森と私のつながり

早朝ハイク

夜遅くまで交流を続けていたのに、全員が起きてきた。昨夜歩いたナイトハイクの林道を歩く。同じ道を歩いているとは思えない、新鮮な景色が目に入る。



特別講座「稲本正、地球環境を語る」

温暖化問題を引き起こした現在のシステムは賞味期限が切れており、時代は変化を必要としている。木材は再生可能な資源であるばかりか、特性は金属より優れている。木材自給率と食料自給率に数年で目処をつければ危機を乗り越えることが出来る。この講座の受講生は、アーリーアダプターとしての役割を担わなければいけない。

学生たちにとって始めて聞く内容も多かったが、将来を見据える上で、重要な話だった。



実技「森づくり実践編」(前半)

自分たちで考えて、自分たちで行動に移す場となる。2グループに分かれて森の手入れの作業に入る。意味もなく分けたグループだが、林業知識のまったくないグループと、林学を学んでいる学生の多いグループとに分かれた。グループ分けを失敗したかと案じたのも束の間、不思議なことに結果として目指すところは同じところに向かってきた。



小講義「森と人とのつきあい方」

森の手入れ自体を目的として行なうことは、正直言って難しい。昔の人は、生活に必要となるあらゆるものを森から入手しており、結果として森が手入れされることとなった。では、そういう昔の人は森をどう見ていたのだろうか。使いようかと思っていた木の枝も、見方を変えたととても役に立つ道具そのものではないか。

次に行く、ミュージアム飛騨での民具見学につながる話だ。見学「森人の暮らしを見る」



ミュージアム飛騨に移動し、民具の常設展を見学。昔の人が森から入手した材料を具体的に生活にどのように生かしていたのか、そこに昔の人々の知恵と工夫・それを形にするための技を見た。



実技「森づくり実践編」(後半)

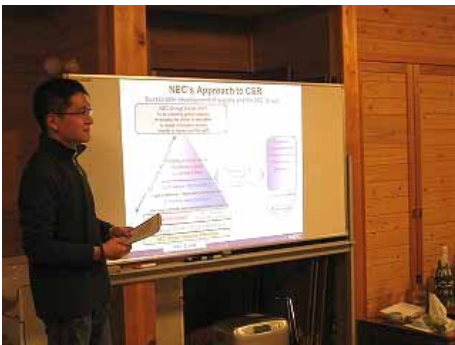
この講座の協賛企業である NEC から、担当者の CSR 推進本部 社会貢献室長・東さんと、東さんが誘ってくださった海外からのインターン生・デニスさんも森の手入れに参加していただくことに。

あいにくの雨模様の中だったが、午前中の作業内容を再確認した上で、午後の方針を決めて作業に入った。

森づくりのまとめ(ピフォーア・アフター)

森の手入れの変化と自分の中の変化を話してもらった。

手入れで森が変わると同時に、自分の心にも大きな変化を生じる手入れとなったようだ。



特別講座「NEC に見る企業の CSR 活動」

実は日本語がとても流暢な NEC インターン生のデニスさん。NEC が行なっている CSR 活動について、英語でプレゼンテーションしてくれた。英語について来られるかと危惧したが、みんな真剣に話を聞いている。CR と CSR との違い、ステークホルダーとしての地球環境の位置付け、大企業だけでなく中小企業も CSR 経営が重要なことなど、内容的には難しいものだったが、質問も一生懸命英語で行なっていた。英語が難しかったという人たちも、これからの時代は、英語も必須だと言うことを痛感したようだ。



トークセッション

オークヴィレッジ代表・稲本さん、NEC・東さん、NEC インターン生・デニスさんを交えての質問タイムとなった。質問を紙に書き込み、順に話題を進めた。時には英語も混ぜながら、企業の行なう CSR 活動について、あるいは環境問題について真剣に話し合う場となった。

引き続きに行なった交流会では、やりたいと思っていることと、それを実現するために何をすべきかについての詰めめを指摘される場面も。学生たちの甘い考えに、企業人として先輩の東さんから、厳しいアドバイスも飛び交った。



■ 4日目 11月25日(火) 森と私と、社会とのつながり



小講義「木の辿る道 ~ 樹から木へ」

今までは植物界としての森林に相對してきた。しかし大切なのは私たち人間の森への関わり方だ。そのプロセスが森の利用となってあらわれる。普段は木材と言うものが目の前にあるのだが、それも山の木から作られてくるもの。山で伐られた木がどのような過程を経て木材になっていくのか。それをたどってみる。

実技「森づくり・利活用編」

2日目に切り倒してきた直径20cmほどの栗の丸太を製材する。チェーンソーを使った簡易製材機で、丸太を半割りにしていく。半身になった丸太の中身は、木の生長の様子が木目となって現れる。判割り丸太から、必要となる厚さの板を切り出す。フルスロットルでうなりをあげるチェーンソーを握った感触が忘れられない。30cmほどの長さで手鋸で切り、ここからは細かくするのに斧を使った。チェーンソーでの製材は、繊維をせん断してしまうが、薪割りのように斧で割った板は、繊維に沿って割れる。斧で割ると、栗は意外なほど素直に割れてくれた。



実技「森のモノづくり」

見本として、手持ちの道具で加工しやすい箸・バターナイフ・シャモジなどを例示した。各々栗の材料を手にし、暫しアイデアを練る。刃物の安全な扱いについては説明を行い、思い思いの場で作業に入った。鉛筆を削ったこともない世代だから、刃物で木を削って削りくずが出てくるだけでも面白がっている。お昼をはさんでめいっばいの時間、木と格闘しながら自分の作品を手でつくりあげた。

少しの道具と技、そして知恵があれば、生活に必要な日用品は自分でつくりだせる。こうして木を暮らしの中に生かすことから、森との関わりが生まれる。





見学「森林たくみ塾」

自分たちと同じ年代の若者たちが木工職人のプロを目指して修行する森林たくみ塾を見学した。大学とは違う「現場で学ぶスタイル」が新鮮なようだ。



見学「オークヴィレッジ」

ふんだんに木を用いた作品が展示してあるオークヴィレッジのショールームを見学。木と木を組む方法、木目を見る方法、適材適所に木を使う話などを聞いた後に作品を見ると、理にかなったつくりをしていることが見て取れる。木製品を見る目がずいぶんと変わってきたようだ。



実技「森のモノづくり ～作品発表」

思い思いのカタチに出来上がった作品たち。苦勞したところ、楽しかったところを話してもらった。みんな、無心になって楽しんだようだ。



トークセッション

毎晩トークセッションを重ねてきたことで、深い話題も気兼ねなく話し合える仲になってきた。友達同士では話題となりにくいような恋愛観・職業観などについて夜遅くまで尽きることなく語り合った。

■ 5日目 11月26日(水) 別れ、旅立ち



スライドショー「5日間をふり返って」

あっという間の5日間を、取りためた写真でふり返る20分間。この後のソロにつなげるための、重要な時間。

最後の話し合い

学生たちからの申し出で、まだ腑に落ちていない部分をこのメンバーで話し合っておきたいとの意見が出た。時間をとり、森づくりについての話し合いを行なった。



実技「ソロ ~ひとりでふり返り」

この5日間、たくさんの人との交流と、森の中での実践でいろいろなことを考え、感じたことと思う。ここでは、ひとりきりでこの5日間をふり返る。

いっぱい溢れそうになった頭の中を整理するための大切な時間。自分と向き合い、自分との対話をする時間。将来を見据えて今を考える時間。

小講義「自然観について」

環境問題を考えるとき、いつも大切なのは「自然に対する自分の見方」。どのように見ているのか。それを常に意識していないと大切な議論がすれ違ってしまうことになる。「日本的な自然観」と「合理主義的な自然観」の狭間で揺れ動く、私たち日本人の特性を理解しておくことは重要なことだ。残りわずかな時間ではあったが、「自然観」について話をした。

ひと言講義

いよいよ別れの時。

この後はネットワークというものの存在が大きくなっていく。「人がつながるための仕掛け = 企画」のポイントを5W2Hにまとめて、本当の「ひと言講義」となった。

全体のふり返り

長くて短い講座だったが、たくさんのことを吸収してくれたことだろう。ひとりずつからこの講座を通じて感じたことを述べてもらった。

閉講式

後期講座までに、初めの一步を踏み出すことと再開を約束して、4泊5日の講座を終了した。



■Aコース:オークヴィレッジ/森林たくみ塾、受講生(17期生)の感想です。

あなたは、この講座で関わった人たちと、どんな交流を持つことができましたか。

- この講座での人との交わりは、心底自分の固定観念を壊してくれた。この講座はここまでの威力を持つものだからこそ、先輩や後輩ともっと話す機会を持っていきたい。
- 自分が思いもしなかった疑問に熱く議論する場面も。そのことは、知っている人どうしで話に花が咲き多弁になるときよりも、言葉につまずきながらも精一杯に考えることが出来る貴重なものだったと思います。
- 今回の講座で初めて出会った仲間、スタッフの皆さんなど、多くの人と交流する機会がありました。その中で私はたくさんの「会話」をして相手を知り、また自分も知ってもらいたいと思いました。「会話」をしながら、心と心の交流を目指しました。
- 人の意見を「聞く」のではなく、「理解する」ということを一番に感じています。「一人一人の意見が違う」というのはある意味当たり前だけど、その意見から生まれる新しい自分の意見が、自分の中で一番大事なこととなりました。
- 16期生からはこの講座でどんなことが自分自身の中で変わったのか、という話を聞くことが出来た。スタッフの方には、専門的な知識を教えてもらったり、人生経験を話していただいたり、自分も20年後にはそういう人になりたい。17期生とは、環境や森に対する価値観をぶつけ合うことが出来た。とてもいい刺激を得ました。
- バックグラウンドがまったく違う人から聞く話はとても刺激的で、新しい知識や考え方を吸収しようと質問をたくさんしました。
- 多様な考え方をを持った学生が全国から集まり、また森や自然環境教育のことを真剣に考えている大人にも出会えた。そういう人たちの考えを聞いたことが自分にすごく大きなインパクトを与えた。夜はトークセッションの中で人生観や教育についても話せた。みんな包み隠さず、さまざまなことを話してくれた。
- 専門性を持つ人や、何かやってみたいという熱い気持ちを持つ人たちと、NPO・行政・企業とさまざまな視点から議論できた。
- 「素の自分を出す。」全員バックグラウンドも考え方も違う中で自分の意見を言ったり他人の意見を聞いたりしていくうちに、お互い理解しあえたり、自分を出すことが出来たと思う。もともと本音で話すのが苦手なのに、本音で言えるようになって驚いた。
- 身近な友達にさえ話さないことをまじめに話すことができて、自分自身をさらけ出すことが出来た。たとえば環境問題や将来の進路、価値観、これまでの活動経験などありとあらゆることを交換しあえた。

あなたは、森からどんな気づきを得ることができましたか。そして、どんな森人になろうと思いましたが。

- 森は人の気持ちを楽しく、そして癒してくれる。そんな不思議な力がある森を愛する人になりたい。そして現場で森を守っている人たち(NPO など)と共に、またサポート側(企業)として活動していきたい。
- 普段生活の中で何気なく使っている木製品を見る目が変わりました。木という素材の魅力や環境への負荷など、まったく知らなかった知識を得たことで、見える世界が変わりました。また森の手入れをしながらみんなとコミュニケーションをしていく中で景観という切り口から楽しくなる森と関わっていく森の人になりたいと思いました。
- 講座の3日目位まで、「森の人」づくりという考えしかなかった。けれど2班に分かれて別々に作業しても、(専門知識の有無に関係なく)方向性が同じになっていく。これこそ森が私たちを導いているのだと思った。机の上での勉強よりも、森に入って"感じる"ことこそ、森が人を作っているその瞬間なのではないだろうか。森が人を作る、育てていくということを、次の世代に伝えられるような人になりたい。いやむしろ、なる。
- 初めのころは、森にかかわることで、より多くの知識を身に付けようと考えていました。けど、森や木々の命について考えていったとき、そこに矛盾が生まれてきました。木々の命、森の命、あわせる視点によって考え方はいくらだって変化していきました。人にとっての森、森にとっての人、どちらも考えられる。一人一人ちがっていいんだ。そういうのを見つける手助けができる人になりたい。
- 森のため・環境のためと、何か義務感のように思いながら行動するよりも、もっと単純な動機「笑顔が見たい」といったような気持ちで自然と共生することが、結果的に環境問題解決の第一歩になるのではないかと感じた。進路が直接森と関わらないとしても、木を大切に使う気持ちをずっと持っていたい。
- 自分で森を感じてみる。体を動かしながら自然の中で森と関係するとぜんぜん違うことが見えてくると感じた。森が人の生活を支えていることも知った。少なくとも僕は森に支えられて生きている。それだったら森にとっても人間にとってもいい関係をつくって行って、森がいつまでも生きられるようにしたい。
- 森の手入れをしている中で、衣食住のことや木々一本一本について話をし、いかに私たち人間が普段多くの命をいただいている事を学び考えさせられた。たった5日間で自分の中で何かが変わったっていうのがわかってすごくそれがよいと思ったから、多くの人に自然のことを伝えられる森の人になりたい。人が成長するには、人が関わっていくのだと思った。一人では成長できないのだから、ネットワーク(人の輪)が大切と感じた。
- 里山というものを知識の上では理解していたが、実際にどういうことを意味しているのか理解していなかった。森のため、環境保護のため、地球温暖化防止のためという漠然とした理由のもとで動くことも大切かもしれないと思うのですが、楽しいから、生活に必要なだからという単純な理由でいいんだなと気付かされました。まずは自分が楽しめる森の人になりたいです。
- 森が生み出すものを、人が知恵を出して手を加える関係がとても気に入りました。せっかく森に行く機会があるのだから、ちょっとナイフでも買って持って行ってみようかな?どんな風に利用されてきた樹種なのか調べてみようか?という気になっています。森の恩恵を知っている森の人になりたいです。
- 環境問題、環境教育ってもっと楽しく考えてもいいのかもしれない。"森と共に生きる"と言うと大げさかもしれないけど、自分たちの生活の一部に森や木や木材を取り入れることはいいことだし、楽しい事だよっていうことを少しでも多くの人に伝えたいと思います。

プログラム紹介

B コース: キープ・フォレスターズ・スクール

場所: 山梨県北杜市清里町

日時: 2008年11月22日～11月26日

■講座のねらい

環境問題解決の第一歩は、コミュニケーションから。自然と人、人と人をつなぐ「インタープリテーション」の考え方や手法を学びながら、自分のコミュニケーションを見直し、“今、自分ができること”を考えます。

環境教育について学ぶ（企業やNPOにおける環境教育の取り組みについて知る）
インタープリテーションの考え方や手法について学ぶ
自分自身と環境教育との関わりについて考える
全国の仲間とのネットワークを作る
自分自身のねらいを達成する



■そのために大切にしたいこと

体験から学ぶこと
お互いから学ぶこと
楽しみながら学ぶこと

■プログラム進行表

1日目 / 11月22日(土) テーマ: 出会う

日の出 06:27・日の入 16:35 / 月の出 01:04・月の入 13:17 月齢 24.2

13:05	16期生	講座の準備(ふりかえりと目標設定)
13:30	16期生	実習:環境教育プログラム実施の準備
14:30	全員	開講式 / オリエンテーション
15:00	全員	実習:環境教育プログラムの実施 & 環境教育プログラムの体験
16:20		休憩
16:40	16期生	実習:環境教育プログラム実施のふりかえりとわかちあい
	17期生	講義:環境教育概論 「体験を通して学ぶ」「伝えるということ」「インタープリターとは？」 「ねらい(行為目標、成果目標)」
17:30	全員	目的の共有化 & 自己紹介 講座の目的 & スケジュールの説明、持ち物を使った自己紹介
18:10		夕食
19:20	全員	環境教育プログラムの体験 ナイトハイク
20:00		1日を整理する時間



=====
2日目 / 11月23日(日) テーマ:つなく

日の出 06:28・日の入 16:35 / 月の出 02:05・月の入 13:43 月齢 25.2
=====

07:05 **16期生** 受講生の時間
17期生 実習:環境教育プログラムの体験 ガイドウォーク
08:10 朝食
09:30 **全員** 実習:森林管理作業体験
自然歩道の補修、間伐材を使った柵作り
12:15 昼食
13:10 16期生クロージング
「今の気持ちは?」「16期生から17期生、17期生から16期生へのメッセージ」
14:00 16期生お見送り

--- ここから 17期生のみ ---

16:10 講義:環境教育概論
「環境教育ってなに?」「環境問題はなぜ起こる?」「環境教育のスタイル」
「インタープリテーションの切り口」「環境問題解決の3つの方法」
「引き出す」「環境教育とは?」
17:25 講義:企業におけるCSR(NEC / CSR推進本部社会貢献室 池田俊一さん)
18:10 夕食
19:25 質疑応答
「今の仕事についたきっかけは?」「将来の夢は?」
20:00 1日を整理する時間
=====

3日目 / 11月24日(月) テーマ:気づく

日の出 06:29・日の入 16:34 / 月の出 03:05・月の入 14:10 月齢 26.2
=====

08:00 朝食
09:30 実習:環境教育プログラムの体験 森林療法プログラム
11:45 昼食
13:05 講義&実習:コミュニケーションを知る
14:40 休憩
14:55 講義&実習:コミュニケーションを知る
15:10 休憩
16:10 講義&実習:コミュニケーションを知る
18:10 夕食
19:20 講義:環境教育概論
「環境教育指導者としてのありかた(心持ち)」
19:45 環境教育プログラムの体験 スライドショー『一本の樹』
20:05 1日を整理する時間

=====
4日目 / 11月25日(火) テーマ:伝える

日の出 06:30・日の入 16:34 / 月の出 04:06・月の入 14:39 月齢 27.2
=====

08:00 朝食
09:25 講義:インタープリテーション概論
「プログラムデザイン」「アクティビティとプログラム」「ねらい(行為目標と成果目標)」、
「インタープリテーションとは?(見えるものを通して、見えないものを伝える)」
09:40 環境教育プログラム実施のオリエンテーション
10:00 環境教育プログラム実施の準備
12:00 昼食
13:00 実習:環境教育プログラム実施&相互評価
15:00 休憩
15:40 実習:環境教育プログラムの練り直し
16:20 休憩
16:40 講義:インタープリテーション概論
「自然体験活動の4つの力」「体験学習法の循環過程」「コンテンツとプロセス」
17:30 講義:安全対策
「自然体験はなぜ必要?」「環境教育=安全教育」
「危険因子(見える危険、見えない危険)」
18:00 夕食
19:15 環境教育プログラムの体験 ナイトハイク
20:15 1日を整理する時間

=====
5日目 / 11月26日(水) テーマ:ふりかえる

日の出 06:31・日の入 16:34 / 月の出 05:06・月の入 15:12 月齢 28.2
=====

08:00 朝食
09:30 ディスカッション
ウォーミングアップ:「白菜漬け体操」「シッティングチェア」
実習:18期生への環境教育プログラム実施を考える
11:00 講座のふりかえり(一人で過ごす時間)
12:10 昼食
13:00 講座のわかちあい
ふりかえりシートの読み合わせ、後期課程に向けて宣言
13:30 17期生クロージング

■ 1日目: 出会う

講座の準備(ふりかえりと目標設定 / 16期生)

実習: 環境教育プログラム実施の準備(16期生)



前期講座からおおよそ2ヶ月。16期生は再び清里に集まった。お互いに再会を喜びながら、前期講座のことを思い出していく。そして、改めてこの講座における自分自身の目標を考えた。その後、環境教育プログラム実施に向けて、グループに分かれて準備を進めた。開講式までの限られた時間で、グループ内の意見をまとめ、プログラムを組み立てていく。

開講式/オリエンテーション



16期生がプログラムの準備を進める中、17期生も続々と到着し、16期9名、17期生10名の計19名が、会場のフォレスト・キャンプ場に顔を揃えた。緊張した表情で席につく17期生の様子から、2ヶ月前の自分たちを思い出す16期生。いよいよ、5日間の講座の幕が開いた。

実習: 環境教育プログラムの実施(16期生) & 体験 (17期生)



前期講座で取り組んだ環境教育プログラムを、17期生を対象に実施する。16期生にとっては、講座の総仕上げであり、より実践的なインタープリテーションの実習となった。プログラムを進めるうちに、お互いが打ち解けあい、自然と学生同士の会話が弾むようになった。17期生には、清里の自然に触れる最初の時間にもなった。

講義: 環境教育概論 (17期生)



最初の講義では、今回の講座の目的や進め方について理解する時間となった。先ほどの環境教育プログラムの内容を例に、インタープリターやインタープリテーションの定義について整理した。Bコースでは、コミュニケーションの考え方の一つであるインタープリテーションを中心に学びながら、これから5日間、環境教育について考えていく。

環境教育プログラム実施のふりかえりとわかちあい(16期生)



17期生が講義を受けている間、16期生は先ほどの環境教育プログラムについてふりかえる。前期課程の実習からは改善ができたものの、インタープリテーションの基本的な考え方を忘れていたという意見もあった。前期課程から続いた一連のインタープリテーションの実習で、その最後にもう一度、インタープリテーションで大事にしたいことを考えることができたようだ。



目的の共有化(ねらいの確認) & 自己紹介

全員で集まり、講座の目的や5日間のスケジュールなどを説明した後、席を囲んで改めて自己紹介。講座に来た動機や理由はそれぞれ異なるが、環境教育を学びたいという意欲は皆同じ。お互いのことを知ると同時に、自分がなぜこの講座を受けているのか考える時間にもなった。

環境教育プログラムの体験 : ナイトハイク

17期生にとっては、最初の夜。夜の闇に包まれながら、一人で地面に寝転がっていると、自然と今日の出来事を思い出す。初日の緊張や不安から少しずつ解放され、わずかな自然の変化を、感じ取ることができるようになった。

■ 2日目: つなぐ

環境教育プログラムの体験 ガイドウォーク(17期生)

2日目の朝。朝食前に周辺の自然歩道を散策する。雲一つなく晴れ渡った空は、冬の空気に満ちていた。吐く息の白さや、霜柱の大きさにも、今の季節を感じる。やがて森を抜け、突然広がる展望に歓声上がる。目の前には広大な牧草地。いつまでも眺めていたい風景を前に、今自分が清里の自然の中にいることを実感した。



実習: 森林管理作業体験

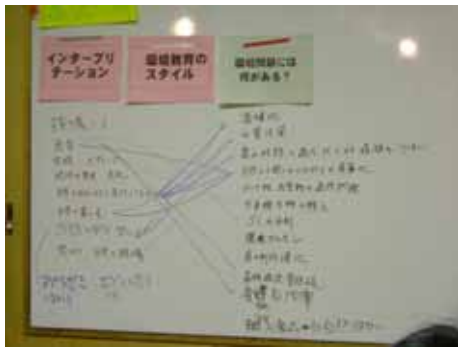
講座で大切にしていることは、体験から学ぶこと。この日は、実際に自然歩道(トレイル)の整備をしながら、森林の管理や共同作業におけるコミュニケーションを学んでいく。慢性的に水たまりができる場所に側溝を作る、歩く人がトレイルから外れないように間伐した木を用いて柵を設置する、といった作業を班に分かれて行った。時間も道具も限られた中で、目標を達成するために、班で相談しながら作業を進めていく。共同作業の楽しさや難しさを実感する時間になった。作業を終えた全員の表情からは、達成感が感じられた。また来年、この場所を訪れるのが楽しみだ。



16期生クロージング

早くも16期生にとっては最後の時間。全員がそれぞれメッセージを紙に書き、その紙を見せ合いながら、仲間の気持ちを受け止めていく。最後に16期生一人ひとりが感想を述べ、込み上げてくる感情を抑えながら今の気持ちを素直に伝えた。それは、かけがえのない仲間と出会えたことの喜びと感謝に溢れていた。





講義:環境教育概論

16期生を見送り、いよいよこれからは17期生10名だけの時間となる。ここで改めて、今回の講座で学ぶ「環境教育」について整理した。環境教育は、環境問題解決の方法の一つであること。また、「インタープリテーション」が、環境教育における一つの手法であることなど、それぞれの言葉の定義を考えると同時に、自分の足元から環境問題を考える機会になった。



講義:企業におけるCSR

NECの池田俊一さんより、NECのCSRにおける社会貢献の位置付けや基本方針、具体的な取り組みについて話を伺う。一例として、企業とNPO/NGOとの関係が話題になったが、両者の関係は、従来の「支援」から「協働」へと変わり、そして今後は「共創」に進むことが示唆された。将来や就職について考える時期にある学生には、企業の方と直接話すことが出来る貴重な機会となった。



質疑応答

夕食後は、NEC池田さんを再びお迎えして、学生からの質問に答える時間となった。「今の仕事についたきっかけは?」「将来の夢は?」などといった質問に対して、紙にキーワードを書いて回答するという形式を試みた。これからの自分の進路や生き方について考えている学生にとって、池田さんやスタッフからの回答は、参考になったようだった。その後の自由交流会にも、池田さんにはご同席いただき、学生も熱心に池田さんのお話に耳を傾けていた。



■3日目:気づく

環境教育プログラムの体験 森林療法プログラム

キープ協会で行っている様々な環境教育プログラムの一つとして、近年特に力を入れている、森林療法のプログラムを体験した。前職が看護師であるスタッフの案内で、森の中で寝転がる、隣同士の人と背中合わせになって、お互いの体温を感じるなどの体験から、自然と人間、それぞれに「命」があることを、強く感じる時間になった。

講義 & 実習: コミュニケーションを知る

午後になると、この時期には珍しく雪が降り始めた。降り積もる雪を眺めながら、室内での実習を中心に、お互いのコミュニケーションを深めていく。ボールやフラフープなどの道具を使った課題が示され、課題を達成すると同時に、グループの中で起きていたこと、自分の心の中で起きていたことをふりかえる。コミュニケーションにとって大切と思われることは何かを、体験を通して楽しみながら学ぶことができた。



講義: 環境教育概論

午後の実習で、コミュニケーションの大切さを学んだ後、この時間では、インタープリターとして必要な資質は何かを考えた。いよいよ、明日は自らがインタープリターとして、環境教育プログラムを実施することになる。

■ 4日目: 伝える

講義: インタープリテーション概論

環境教育プログラムの実施に向けて、実際に自分たちで行なうプログラムをどのように組み立てれば良いのか、今までに体験したプログラムを参考に、プログラムを組み立てる上で必要な視点や考え方を、講義を通じて学んだ。



実習: 環境教育プログラム実施 & 相互評価

自らが環境教育プログラムを実施することで、インタープリテーションについての理解を深めていく。実施後には、相互に評価(フィードバック)を行い、より良いプログラムに発展させるまでの一連の過程を体験する。今回の実習では、プログラムの準備はグループで協力して行なうが、プログラムの実施は、一人で行なうこととした。そうすることで、役割が分散することなく、誰もが当事者として実習に取り組むことができるようになった。

そしていよいよプログラムの実施。緊張はあるものの、それぞれが一生懸命にインタープリターとして、プログラムを行っていた。自らがインタープリテーションをする立場になって初めて、インタープリテーションの楽しさや面白さ、そして同時にその難しさを知ることができたようだ。

実施後、他のグループからのフィードバックを参考に、良かった点、改善点を話し合い、プログラムを練り直した。次回はこの改善案をもとに、まだ見ぬ 18 期生に向けて、再度プログラムを実施することになる。



講義: インタープリテーション概論

環境教育プログラムを自ら実施した上で、再度インタープリテーションの考え方について整理する時間。合わせて、プログラムを実施した結果だけではなく、実施にいたるまでの過程もふりかえることで、そこで起きていた様々な心を動きも捉えることが大事だということを知った。



講義: 安全対策

自然体験では欠かすことができない、安全についての講義。自然に潜む様々な危険因子について考えながら、危険には「目に見える危険」と「目に見えない危険」があり、「目に見えない危険」への対策は難しいものであることを知る。自然体験には危険がつきまとう反面、自然の中で行われる環境教育が、安全教育の側面も併せ持つことも学んだ。

環境教育プログラムの体験 : ナイトハイク

小さなキャンドルを持って、ゆっくりと森の中に入っていく。星降る静かな夜に、キャンドルの火を絶やさないようにしながら、ペアになって、これまでの体験や今の気持ちを話す。夜の力も借りて、自分の気持ちを素直に話すことができ、そして、それを受け止めてくれる仲間の存在が大切に思えた。



■ 5 日目 : ふりかえる、伝える

ディスカッション: 18 期生へのプログラム実施について考える

コミュニケーションを深めるエクササイズなどを体験した後、次回後期課程での 18 期生への環境教育プログラム実施について、全員で考える時間となった。一つの問題を克服したり、課題を達成したりするのに、合意形成をしていくことの難しさを感じながら、それでも、お互いが分かり合えるまで議論しようという、5 日間で培ってきた 17 期生 10 名の、絆の深さを感じる時間だった。



講座のふりかえりとわかちあい

これまで講義や実習を通して学んできたことを整理する時間。まずは、一人になって、5日間の出来事をふりかえりながら、印象に残ったこと、自分自身のために書きとめておきたいことをまとめた。そして、この講座で学んだことを今後どのように活かせるか、グループの中で発表した。



17期生クロージング

最後に、次回後期課程に向けて、それぞれの目標を宣言して、5日間に及ぶ前期課程を終えた。ここからが始まりだという決意を胸に、そして次の再会を楽しみに、全員が笑顔で清里を後にした。

■Bコース:キープ・フォレストーズ・スクール、受講生(17期生)の感想です。(抜粋)

この清里の講座では、環境教育を通して、普段では学ぶことが出来ない様々なことを学ぶことが出来ました。全国から集まった人たちと仲間になり、自分たちの夢について話し合うことで、お互いの可能性を知り、自分の可能性を高めることが出来ました。また、この経験は他の人に伝え、自然を守る責任があるはずで、私はこのプログラムを通して、コミュニケーションとは「自分で作った壁を取り除くこと」、「相手を知ろうとすること」が大切だと感じました。そして、今まで環境教育とは、環境問題を改善することだけが目的だと思っていました。しかし、この講座で学んだことは、環境教育とは環境問題の解決だけではなく、自然を感じることによって、人生を豊かにすることもできるということです。

私は公務員の技術職の環境部門を希望しています。将来、行政側から住民への環境教育をしていきたいと思えます。そのときに、この講座で学んだことは必ず活かすつもりです。今後の環境教育活動としては、環境教育を環境問題の解決方法の一つに限定せずに、その人の人生に貢献できるような環境教育活動を実施・サポートしていきたいと思えます。

私は環境教育活動で自然の魅力や大切さなどを伝える方法・道具・考え方など、「伝える力」を身につけるために参加しました。講座の中では、様々な伝える方法を体験しました。また、ナイトハイクシート・キャンドル・絵本など、道具の重要性も再認識しました。環境教育の第一歩は自然と遊びながら触れることだと思えます。子ども時代に体験した自然の中での遊びは大人になっても原体験として残ります。それが自然に対する考え方の基礎にもなると思えます。今回の講座で体験したことを自分なりに噛み砕き、実際にプログラムを行なうことで「伝える力」をさらに成長させていきたいと思えます。私も自分らしい「伝え方」を実践の中で身につけて、今後も活動していきたいと思えます。

今回の講座を終えて、もっと環境教育に関するセミナーや講義をうけていこうと思った。今まで自分が参加してきたものは野生動物の調査やその手法に関するものが多かった。なので、環境教育やそれらに関する知識はほとんどなく、講座を通して自分が知らなかったことを数多く知ることができた。活動範囲を大学にとどめていては、学べることは限られてくるので、これから機会があれば可能な限りこのような活動に参加していき、出会った人から多くの話を聞いて、自分の世界を広げていきたいと考えている。また、活動に参加するだけではなく書籍を読むことも大切であるな、と思った。講座中の「体験してから講義をうける」もしくは「講義をうけてから実際にやってみる」というやり方のおかげで、より体験や知識が身に付いたように感じる。体験だけでは足りない部分、講義では足りない部分をお互いが補い合っていたからであろう。最後に、自分の先輩や後輩など自分の周りにはいる人たちに環境教育に関する情報を流していきたい、と考えている。今回の講座で知ったこと、聞いたことを活かして自分で情報を集めていき、それを周りの人たちにも伝えて、その人たちが自分から動き出す後押しをしていきたい。

私はこの講座に参加して、自分の原点を見つけることができました。それは「自然が好き」ということでした。自然が大好きだから、自然のそばにいたい、これが私の原点です。とても単純で、でも一番忘れてはいけないことでした。私は、そのことを自然から教えてもらいました。

インタープリターは「教える」のではなく「伝える」ということが重要なのだということ、この講座を通して改めて感じました。自然を知ろう、一步自然に近づこうと思っている人たちに、インタープリターが自然について教えるという行為をしてしまったら、そこからその人たちが自然に近づく道はなくなってしまいます。何かを教えるのは自然自身なのだと思います。そのために私は自然が出しているメッセージや声を伝えるインタープリターになろうと思います。

清里では、五感が研ぎ澄まされた気がします。その感覚のおかげで、東京に帰ってきて今まで気付かなかったような小さな自然に気がつくようになりました。東京は清里に比べると自然は少ないですが、それでも場所によっては木々がざわめいたり、川のせせらぎの音を感じたりします。小さいけれど、確かに自然はある。清里に行って気がついたこのことを、僕は他の人に伝えていきたいと思います。

清里から帰ってきた翌日の朝、僕が所属しているサークルが行っている環境教育のプロジェクトがありました。うまく清里で得た経験を生かされたか分かりませんが、まずは第一歩です。清里でキープ協会の方々に「伝えて」もらったことを、これからは僕が「伝えて」いく番だと思います。様々な機会を捉えて、環境教育と関わっていきたいです。

以前の私の中では、環境教育とは専門用語が沢山あってとにかく難しいものという漠然としたイメージでした。今回の講座を終え、環境教育というイメージが180度変わりました。まず、講座初日に16期生がアイスブレイキングとして自然の中でゲームをしました。そのプログラム自体が環境教育だということに驚きました。私はなんて難しく考えていたのだろうとその時思いました。

私は大学で神職の資格を取るために勉強していて、また外部でアロマセラピーの勉強をしています。私は環境関係の学部ではないし、どのようにして環境教育活動に携わろうかと期間中ずっと考えていました。自然には神様が宿ると神道では考えられています。これからの時代は自然を通した神道教化をしていくことが大切だと思いました。また、アロマセラピーは自然の恵みによって成り立っています。アロマセラピーを通して伝えられることは沢山あります。アロマセラピートリートメントをしながら、またアロマクラフトをしながら。環境教育は色々な面から伝えることが出来るということに気づき、私は私なりの方法で環境教育活動をしていこうと思いました。

私は本講座を受けるまで、ただ漠然と環境教育に携わる仕事に就きたいと考えていました。しかし今回、環境問題解決のための3つの手法は「規制・技術革新・意識改革」であると具体的に学んだことで、自身が意識改革の手法から環境教育に携わりたいということを明確にすることができたからです。

また、講師から受けた「よき指導者はよき参加者になる」という言葉を忘れずに自然と人、人と人をつなぐことのできる環境インストラクターを目指したいと思います。

今後は、この経験を活かし、次のステップへと踏み出します。そしてインターンシップなどに意欲的に参加し、自分が本当に現場で働きたいのかの見極めをしながら、将来いかにして環境教育に携わっていくかを、ゆっくりと考えていきたいと思っています。

この森の人づくり講座で私は自分が必要だと思っていたことを再確認することができました。それは、人とつながるといことは、私にとってやはり必要なことだ、ということです。

進路的な関わり方としては、自分の専門の心理学からのアプローチがしたいと思っています。人と人をつなげてくれる「場」としての自然体験ということについて、まずは目下のゼミ論で取り上げてみようかと考えています。将来的には、人と関わる仕事をしながら、コミュニティづくりの場としての自然や自然体験について研究したいと思っています。そして個人的な目標ですが、もっと人を「みる」ことができるようになることと、コミュニケーションが上手くできるようになることが、私の課題です。人と人をつなげられる人・人と自然をつなげられる人・自然の中で人と人をつなげられる人になるために、まず、自分自身が人とつながることができる人になること、それが、私の環境教育への1歩です。

人と自然を結ぶだけでなく、森を通じて人と人を結ぶことに大きな気付きがありました。自然歴史文化を教えるだけに止まらず、人が何かに気付くきっかけを与える事も、インタープリターの役割だと実感しました。

森に対して広い目で見ることができるようになったことは自分の中での一番の収穫です。そして、自分は来年までの目標を、「森に対する見方を増やす」にしました。こうやって、一人で森に入っても気付かないことを、気付かせてもらえるのは、インタープリテーションの大きな醍醐味だと自分は感じました。人と人をつなぐことは非常に価値のあることで、自分は将来、お客さんに染料の栽培や採取、染め、ものづくりの一連の流れで体験してもらうを通して、プロセスを理解し、みんなで楽しんでもらいながら、自然の色を本当の意味で身近にしてもらう事も考えていて、今回学んだことを発展させてより具体化をしていきたいです。